

2021/9/20

(うと Q 世話し よう分らんが、暫く是で行くべき)

「ゴール目指してまっしぐら」

よく耳にします。

昔は自分も余り考えもせずに口にしておりましたが、最近ふと

「そういえばゴールと云う時、無意識に直線を思い浮かべているなあ」

と妙な事に気づきました。

紆余曲折だった五輪のせいでしょうか。

「何も全てがゴールへ向けての一直線ダッシュ 100 メートル走という訳ではないな。例えば 1500 メートル走では直線と曲線の組合せの先にゴールがある」

そして更に

「そういえば遊園地の迷路は、右に行ったり左に行ったり、先に行ったり後に戻ったりの先にゴール（出口）があるなあ」

そして又更に

「迷路の曲がり方は 90 度や 180 度だが、迷路以外では自由曲線というものもある。それこそどっちに伸びるか分からない線。オマケにこの線にはゴールがありそうもない。勝手気儘にどんどん伸びていく」

話は変わって、かの坂本龍馬が

「道が一つと言う事はない。百も千もある」

と言ったとか。

この言葉を引き合いに出す方が結構います。

自分も時々使います。

しかしこの文言は取り様によって二通りに解釈できる様な気がします。

一つは

「(ゴールに至る選択肢) が一つと云う事はない。百も千もある」

今一つは

「(ゴールそのもの) が一つと云う事はない。百も千もある」

この時

「道が百も千もある」

と言った意味が前者を指すのならよくある話だが、もし後者を指しているならもっと世界が拡がる気がする。

しかし更に論を進めれば

「全ての道にゴールがあるとは限らない。ゴールがない場合もある」

と言うのも話としてはあり得る。

そうなると組み合わせとして、

「特段これと云ったゴールはない。ゴールがないのだから直線かどうかは無意味だ」

と言う事にもなる。

そういう視点で見ると「ゴールが在り」それに繋がるのは「全て直線」であるというのは修辭学的な「美しい飛躍」の産物で、却ってその美しさが我々の目から世の中の実態を覆い隠して居はしないだろうか？

此処に云う実態が

「紆余曲折」

「一寸先は闇」

「鬼が出るか蛇が出るか」

「行きつ戻りつ」

「再度紆余曲折」

であるなら、一層の事

「焦らずともよし」

「急がば回れ」で

「♪遠回りして帰ろう♪」

と力からを抜く手もある。

何かそっちをイメージした方がこの先余計な落胆をせずに済みそうだし、妙に力んで気色ばったりせずにも済みそうだ。

紆余曲折が世の中の実態（我々の都合に無関係な物事の自律的なメカニズム）であれば耳を済ましてそれに従う。それが何処へ我々を導くのかは知るよしもない故、ゴールの決め様もない。言える事はゴール迄残りあと幾らのその縛りを消して行けるける処まで行く、のでよし。言う迄も無いが常時右肩上りの一直線等在ろう筈もない。それが常態」

そう思えば

ハードルが下がって気が楽になる。

ダメ元でバッファが取れて余裕が生まれる。

結果、ダメ元、元々、元気の素が得られる。

三方よし、かも。

「よう分らんが、暫く是で行くべさ」